「医療を通じて、愛を世界へ。」日本キリスト教海外医療協力会の働き

日本キリスト教海外医療協力会（JOCS）
事務局長／理事
森田 隆（もりた りゅう）

大学卒業後ベンチャーキャピタル勤務を経て、1998年からJOCSのカンボジア事務所代表。その後大学院、JICAを経て2012年4月よりJOCSに戻り現在に至る。

日本キリスト教海外医療協力会（JOCS）は、日本がアジアの人々に対して犯した戦争への深い反省に立ち、和解と平和の実現を願って1960年に設立されました。「医療を通じて愛を世界へ。」のテーマの下、困難の中にある人々の健康といのちをまもり、人々と苦悩・喜びを分かち合うことを使命としています。

JOCSのルーツ

JOCSのルーツは1938年の中国大陸での医療活動に遡ります。当時、日本軍の侵攻によって多くの避難民が生まれるなど、中国の人々は苦難を強いられていました。その窮状を見かねた日本人牧師の呼びかけに応えて、医師や医学生、看護師らの医療チームが大陸に渡り医療活動をおこないました。戦後、その人々も含めたクリスチャンの医療従事者が、混乱の中にあった日本国内で医療奉仕を始めました。この人々のグループから日本キリスト者医科連盟が生まれ、日本キリスト者医科連盟がアジア諸国の医療従事者の日本研修を受け入れるために発足させた団体が、JOCSなのです。

３つの国際協力活動

JOCSの国際協力活動には３つの事業があります。１つ目は、保健医療従事者の派遣です。クリスチャンの医師や看護師などを、アジア・アフリカの国々に派遣しています。２つ目は奨学金支援です。保健医療サービスを受けにくい地域の保健医療従事者を、奨学金で支援しています。３つ目は協働プロジェクトです。現地のカウンターパートと共に活動の目標と内容を決め、協力して保健医療活動をおこなっています。これらの活動をとおして、JOCSは、アジア・アフリカで弱い立場におかれた人々に医療を届け、健康といのちをまもろうとしています。

保健医療従事者の派遣

保健医療従事者の派遣は1961年に始まり、今日までに70人を超える保健医療従事者をアジア・アフリカの国々に派遣してきました。１期３年の任期中、派遣された者は、地域の人々と共に生き、地域の人々の健康をまもるために活動します。任期終了後には活動が派遣先団体や地域の人々によって引き継がれていくことを目標としています。現在は、バングラデシュに看護師を派遣しており、知的障がいのある子どもたちとその家族を支えています。

奨学金支援

奨学金支援では、地域医療の担い手となる保健医療従事者を育成しています。JOCSは、アジア・アフリカの国々で弱い立場の人々のための保健医療活動をおこなうカウンターパートから奨学生を募

子どもの診療をする、JOCS派遣の医師（タンザニア）

バングラデシュの元JOCS奨学生と。（筆者左）

JOCSの奨学金で学んだ看護・助産師（ネパール）

JOCSの奨学生（中央）とシャクンタラ校長（左）（ネパール）

っています。奨学生選考では、地域のニーズ、カウンターパートの人材育成の必要性や方向性を重視し、それに沿う形での選考をおこなっています。奨学生には、研修終了後もカウンターパートで継続して働くこと、研修で得た知識や技術を同僚たちと共有し、カウンターパートやその地域全体の保健医療の水準を向上していくことが求められます。毎年 60 名程度の申請者の中から 20 名程度を奨学生として採用しています。

協働プロジェクト

地域で保健医療活動をしている団体と協力して実施するプロジェクトです。現在は、ケニアとタンザニア、ウガンダでプロジェクトを進めています。ケニアでは、障がいのある子どもとその家族を支える施設で、療育サービスや社会的支援など包括的ケア事業の強化を目指しています。タンザニアでは、周産期死亡率が高い地域で、母子が産前産後や分娩時に適切なケアを受けられることを目指した活動をおこなっています。ウガンダでは、若年妊娠による学校のドロップアウトの多い地域で、若年妊娠予防のための学校保健活動を実施しています。

ネパールでの奨学金支援

JOCS の活動地のひとつにネパールがあります。ネパールへの保健医療従事者の派遣は 1961 年に始まり、1964 年には奨学金支援が始まりました。現在まで 16 名の日本人保健医療従事者を派遣し、延べ 130 名を超える奨学生の研修を支えてきました。

ネパールの首都カトマンズから飛行機で 30 分、その後山道を車で 3 時間登ったところにタンセンという町があります。この町に、看護師や臨床検査技師を育成するタンセン保健科学専門学校があります。

この学校の校長を務めているのは、JOCS の元奨学生のシャクンタラ・タンジュさんです。シャクンタラ校長と JOCS とは過去いくつもの関わりがありました。まず 1975 年、看護学生だったシャクンタラさんは、JOCS が当時派遣していた看護教師、俵友恵さんから看護と助産を学びました。次の関わりは奨学金支援です。看護学校の教員となったシャクンタラさんは、2008 年に JOCS の奨学金で公衆衛生の博士号を取得したのです。そして現在、タンセン保健科学専門学校では JOCS の奨学金で学んだ教師たちが教壇に立っています。

現在、タンセン保健科学専門学校では 200 名を超える学生が学んでいます。街中を歩いていてもシャクンタラ校長が多くの卒業生から声をかけられる姿が見られます。シャクンタラ校長は、自身の礎をつくったのは俵さんだったと言います。「俵先生との出会い、そして JOCS の奨学金で学ぶことができたことは何より大きな恵みです。与えられたその恵みに私は報いることができているだろうかと日々考えています。俵先生は厳しかったですが、とても深い愛を持っていました。俵先生の献身的な働きは忘れられません。あのように情熱と愛情を持って学生たちに接することのできる看護講師になりたいと思ってきました。私の働きは、俵先生がネパールの私たちに残してくれたことに比べると大変小さなものですが、私が学んだことを次世代の看護師に伝え、ネパールの看護の質を向上させていきたいと思っています」

JOCS の活動は、長年にわたりその地に根付き、その地域の保健医療の状況を改善し、人々の健康といのちをまもってきました。JOCS は、国や宗教の違いをこえて「平和を実現するもの」であり続けたいと願っています。